

## アウグスティヌスの「無からの創造」論

—『創世記』第1章1節の解釈をめぐって—

岡野昌雄

### I

1 アウグスティヌスは、彼自身の言わば内的外的生活史を告白しつつ神を讃美した著作『告白録』Confessionesの最終3巻に於て、『創世記』Genesis 冒頭数節の詳密な解釈を試みている。彼がこの告白をなし得たということは、過去の思想的遍歴を整理し現在の立場を明確にするという意味で、彼自身にとって極めて重要な転回点となったが、そこには、当然、長年の懸案であったマニ教との対決・清算という最大の課題が含まれていた。しかも、その論争が専ら『創世記』をめぐるのであったが故に、彼は、『告白録』を、『創世記』解釈という形で、敢えて結ばざるを得なかったのである。彼は、この他にも、創世記解釈に関しては、『創世記についてマニ教徒を駁す』De Genesi contra Manichaeos、『創世記逐語注解』De Genesi ad litteram、『創世記逐語注解未完』De Genesi ad litteram imperfectus等々を残している<sup>(1)</sup>。そこで我々は、以上のような背景を考慮に入れつつ、これらの著作を中心に、キリスト教的創造論の最大特色の一つとされる「無からの創造」creatio de nihilo<sup>(2)</sup>について、彼の思想の特色を探ることにしよう。これが、また、マニ教的二元論と対決する彼の創造論の最も中心的な問題点とも考えられるからである。

2 はじめに、我々の視角を定める意味で、アウグスティヌスの「無からの創造」論について、結論的に二つの特色を挙げておこう。充ず第一には、いわゆる天地創造を第一の創造とし、キリストによる贖罪・新生を第二の創造とする救済史的視点から創造が論じられ、この二つの創造が、常に、

言わば二重写しになっている点が挙げられよう。これは、恐らく、彼自身の深い宗教的体験に基づくものであり、また、神と魂に全関心を集中させ<sup>(3)</sup>るといふ彼の基本的立場に由来するものと思われる。そのため、創造論による自然世界の解明という意味が著しく弱く、常に被造世界の中心たる人間存在が主として語られることになる。そのことは、創造の principium を『ヨハネ福音書』のロゴス・キリストと関連させて解する彼独特の考え方に<sup>(4)</sup>明確に窺われよう。第二の特色としては、マニ教の二元論と対決する意味で、神の超越性を強調し、あらゆる存在するものを善なるものとして神に関連づけ、創造の秩序のうちに一義的に包含する徹底的な一元論の立場が考えられる。そこには、神と世界、永遠と時間を峻別しつつ、両者を関係づけるという重要な課題が含まれており、そこでまた、第一の特色として挙げた点と密接に結びつくことになるのである。我々は、このような彼の立場を踏まえつつ、「無からの創造」に関する彼の思想を追った後に、具体的に『創世記』第1章1節の解釈を見ることにしよう。

## II

3 「無からの創造」を、アウグスティヌスは、「汝が存在し給うて、他のいかなるものも存在しなかったが、その無から、汝は、天と地とを造り給うた。」と表現している。端的に、即ち、或いはこの仕方で或いはかの仕方で<sup>(5)</sup>というのではなく、常に同じ仕方で<sup>(6)</sup>変ることなく存在するといわれるのは、神以外にはない。他の存在するといわれるすべてのものは、存在する限りに於て、この神によって存在するのであり、その存在を神に負<sup>(7)</sup>うているのである。神のみに存在の根源をもつという意味で、存在するすべてのものは善である<sup>(8)</sup>、といわれるが、神によって存在するものとせられた・造られた、という限りに於て、神が善である如くに善なのではない<sup>(9)</sup>。ここに、善悪二元の原理をたてるマニ教に対し、すべての存在するものを善なるものとして神に関連づけ、悪をばこのような善の欠如したもの・非存

在と解して、世界を一元的に説明しようとするアウグスティヌスの立場が、明確に窺われる。存在するものは善なるものとして神によって存在するが、非存在は神によるのではなく、悪もまたこのような非存在と<sup>(10)</sup>考えられる。

ここから、次の三つのことがらが問題となろう。1) 世界が存在するということは如何に解されるか。2) 存在するすべてのものが神によるとするならば、それは神と本質を同じくするものであるか。3) 「無から」とは如何なることを意味するか。

### III

4 神のみが端的な意味で存在し、世界は造られたもの *creatura* であるとする考え方の背後には、アウグスティヌスの世界に対する深い洞察が秘められている、と言わねばならない。「見よ、天地が存在する。それらは造られたものであると叫ぶ。変易し変化するからである<sup>(11)</sup>」。天地、即ち世界もまた存在する。しかし、それらは造られたものである。絶えず変易し変化することが、その証である。世界には、何一つとして、恒常不変なる存在はなく、かつて存在したものは現在存在せず、かつて存在しなかったものが現在存在し、絶えず生成消滅している<sup>(12)</sup>。世界が内に蔵しているこのような変易性 *mutabilitas*こそ、まさに世界が被造物であることを証言するものにほかならない。それは、同時にまた、たとい変易的であるにせよ、存在する限りに於て、世界を存在せしめている根源を、何らかの仕方で示している。「それ故、主よ、汝はそれらのものを造り給うたのである。汝は美しくあり給う。それらのものは美しいからである。汝は善であり給う。それらのものは善だからである。汝は存在し給う。それらのものは存在するからである。しかし、それらのものは、創造主である汝のように美しくもなく、善でもなく、存在するのでもない。汝に比すれば、それらのものは美しくもなく、善でもなく、存在するのでもない<sup>(13)</sup>」。世界は、被造物である限りに於て、何らかの仕方で神を映しているが、しかし、創造主た

る神に比べると、ほとんど無に等しい。それは絶えず変易し変化し、常に同じ仕方では存在することはできない。自らのうちに存在の必然性をもたないからである。しかもなお、それは存在し、全体の秩序に於て美しく善であり、自らの存在の根源である恒常不変なる存在を明らかに示しているのである。

5 この点に関して、マニ教の二元論的立場から、反論がなされる。人類は必ずしも善ではなく、罪の悲惨のうちにおかれている。もしこの世界が神のみによって造られたとするならば、この世界の悲惨からして、神の本性もまた悲惨のうちにあるのではないか。これに対して、アウグスティヌスは、神が無から造った人間の自然本性が悲惨のうちにあることを認めつつも、しかし、それは神がそうであるからでも、また、神がそのようにしたからでもなく、人間の罪の意志 *voluntas peccandi* によるのである、と答えている。この罪の意志は、彼によれば、存在するものから存在しないものへと向う意志のことであり、存在しないものと同様に、神によるのではない。悪は存在するものではなく、存在という善の欠如 *privatio* であり、意志の悖戻 *perversitas* によるのであり、従って、その原因を神に帰したり、或いは、神と対立する何らかの原理をたてることはできない。このような彼の立場から、悪の問題一般に対して十分な解答がなされ得るか否かは問題であるが、そこに、彼自身の宗教的体験が裏打されていることは事実である。道徳的葛藤を善・悪二元理の闘いとするマニ教の二元論によって或る程度心の安らぎを得ていた彼が、回心を通じて、神による統一的人格として立ち、悪を自己自身の罪として引受けるに至る、という経験である。善・悪二元の原理をたてて、悪はすべて、善なる神と対立して存在する悪の原理に基づくのである、とするマニ教の立場は、自らの道徳的責任を回避し、良心の葛藤を暗闇のうちに和らげようとする努力にほかならず、アウグスティヌスの立場からは到底認め難いものであった。

## IV

6 世界が神によってのみ造られ、その存在の根源を神のうちにもつとはいへ、それは、世界が神と本質を同じくする、という意味ではない。もしそうであれば、世界は神と等しく永遠なものとなり、また逆に、世界が絶えず変易することから神もまた同じ変易性を有することになる。世界は「神によって」a Deo 造られたが、「神から」de Deo 或いは「神の本質から」de natura Dei 造られたのではない。世界は、神によって、「無から」de nihilo 造られたのである。<sup>(18)</sup> アウグスティヌスによれば、“de Deo”とは“de substantia Dei”のことであり、それは、神と本質を同じくし、等しく永遠であり、それ自身神である独り子キリストについてのみ言われ得るのである。<sup>(19)</sup> 勿論その場合、“facta de Deo”とは言われず、“nata de Deo”と言われる。それに関連して、彼は、『善の本性について』De natura boni に於て、“ex ipso”と“de ipso”とを区別し、両者の相違を論じている。<sup>(20)</sup> それによると、“de ipso”と言われるものは“ex ipso”とも言われるが、その逆は必ずしも正しくない。天地は神によって造られたが故に“ex ipso”と言われるが、“de substantia sua”ではないので、“de ipso”とは言われぬ。それは、ちょうど、人間が子を生子家を作る場合、子や家は“ex ipso”と言われるが、子は“de ipso”と言われても、家は“de terra et ligno”と言われるのと同様である。しかも、人間は、無から何ものも造ることができないのに、神は、全能の故に、いかなる質料 materia も必要としないのである。以上の論からすれば、正確には、“ex nihilo”でなく、“de nihilo”と言うべきであろう。そのような意味では、世界は、まさに、神ならざるもの・存在しないもの・無から造られたのであり、たとい何らかの質料から造られたとしても、その質料自身は全くの無から造られたのである。<sup>(21)</sup> 神のみが端的に存在し、世界はこの神によってはじめて存在するのであるが、それは、神の本質を分有する「神からの流出」という仕方に

よるのではなく、全くの「無からの創造」によるのである。そこで、「無から」とは如何なることを意味するかを次に尋ねよう。

## V

7 「無から」については、既に或る程度まで答えられたが、簡単に言えば、このように神のみを世界の存在の根源と認める立場の当然の帰結として、それは、創造が神の全く自由な意志による働きであり、神は他の如何なるものも必要としなかったということの意味している。世界に先立って存在するものは神以外にはなく、他は無であり、この無からこそ世界は造られたのである。神のほかに、神と対立したり、或いは神と並んで存在する如何なるものも認めることはできない。このことは、人間の工匠 *homo artifex* と比べることによって明らかにされよう。<sup>(22)</sup> 工匠の働きは、全く新しいものを造り出すかの如くに見えるが、しかし、それは、既に存在する質料に形相を与えるに過ぎず、しかも、その形相を与える精神や技術すらも、工匠自身が造り出したものではないのである。工匠は、存在そのものを与えるという仕方では、ものを造り出すことはできないのである。これに反して、創造主 *Conditor* としての神は、他の如何なる助けをも必要とせず、<sup>(23)</sup> 世界を造ったのである。即ち、存在そのものを与えるという仕方では、全く存在しないものに形相を与えることができるのである。<sup>(24)</sup> もし何らかの助けを必要とすれば、神はもはや全能ではあり得ず、また、創造に先立って、自らと等しく永遠なる何らかの質料を認めざるを得なくなるであろう。質料をもたない<sup>(25)</sup> 観知的存在すらも、神と等しく永遠なものではなく、神の被造物に過ぎない。それ故、神は、自らの欲するままに、他の如何なるものをも前提とすることなく、即ち無から、世界を造ったのである。

## VI

8 それでは、神のみが恒常不変な存在であり、世界は無から神によっ

て造られたとするならば、何故神はこのような世界を造ることを欲したのであろうか。存在するすべてのものの原因が神の意志にのみあるとするならば、何故神がそれを欲したのかが問われるべきであらう。しかし、それに対するアウグスティヌスの答えは、ほとんど沈黙に等しい。『創世記についてマニ教徒を駁す』<sup>(26)</sup>に於て、彼の語るところによれば、神の意志が存在するすべてのものの原因であるが故に、彼らは神の意志の原因を知ろうと求めるが、もし神の意志が原因をもつとすれば、神の意志に先立って何かが存在することになるので、何故神は天と地とを造ったか、と問う者に対しては、神が欲したから、と答えられるべきである、というのである。神は何らかの欠乏の故に世界を造ったのではなく、世界が存在する・しないということは、神の本質そのものに何らの影響も与えないのである。即ち、神の意志を規定する如何なる必然性も存在せず、神はただ全く自由なる意志に基づいて世界を造ったのであり、その原因を求めることはできない。しかし、別の側面から、『創世記』第1章4節その他の「神は見て、善しとされた」という句と関連して、創造の原因が神の善性 *bonitas Dei* にあることが述べられている。<sup>(27)</sup> 被造物は、神の善性の充溢 *plenitudo bonitatis Dei* によって存在するが、それはまた、『告白録』によれば、神の恩寵 *gratia Dei* と解される。<sup>(28)</sup> 世界が造られたのは、神に欠乏ないし必要性があったからではなく、また、世界が、存在するに価する何かを有したからでもなく、ただ神の善性の充溢・恩寵によるのである。「それ故、たといそれらのものが全く存在しなくても、或いは無形態のままであっても、汝が汝にとってそうであるような善に、何が欠けるであらうか。汝はそれらのものを、必要とし給うからではなく、汝の善性の充溢から、抑制し、形あるものに変えて、造り給うたのであって、それらのものによって、汝の喜びが充たされることはないのである。なぜなら、それらのものの不完全性は、完全であり給う汝を喜ばさず、従って、それらのものは、汝によって完成されて汝を喜ばすのであるが、汝が不完全であり給う故に、それら

のものの完全性によって、完成されねばならないというわけではないからである<sup>(29)</sup>。神は、それ自身で充足する完全な存在であり、他のものを俟って、即ち被造物によってはじめて完全になるようなものではない。しかも、世界の不完全性によって傷つけられることも、また、その完全性によって完成されることもないに拘らず、なお、神は、世界の完成を喜び給うのであり、これこそ、まさに、神の善性の充溢にほかならない。世界の完成が神を喜ばすという考えの背後には、個々のものよりも、すべてが共にあることによって、全体として善を全うするというアウグスティヌスの立場がある<sup>(30)</sup>。個々のものは、それ自身としても善であるが、そのように見えない場合もある。しかし、それらすべてが寄り集まって全体として見るとき、それは秩序に適って甚だ善である。すべては、神の支配と秩序から外れることなく、その単一な秩序のうちに包みこまれているのである。

なお、アウグスティヌスは、神の意志について、あれを欲し、これを欲するというような変易的な意志ではなく、恒常不変・永遠なる意志であると述べているが、それについては後に論じられるであろう。

## VII

9 世界は、ただ神の自由なる意志によって、何らの前提も必然性もなしに、全くの無から造られたことが述べられたが、それは如何なる仕方によってであろうか。「無からの創造」は、神の言 Verbum によってのみ造られたのである<sup>(31)</sup>。この「言による創造」が、アウグスティヌスに於ては、「無からの創造」の重要な一面を形成している。

ところで、神の言は、二種類に区別される。第一は、『マタイ福音書』第3章17節及び第17章5節に記されている、「これはわたしの愛する子である。」と雲の中から聞こえた神の言であり、第二は、『創世記』第1章3節その他に記されている、「光あれ」等々の、創造に於て神が語った言である。後者はまた、『ヨハネ福音書』第1章1節以下と関連して、ロゴス・

キリストと解される。前者は、雲の中から起こり、最初の綴りから第二・第三の綴りへと聞こえ、次第に消え去った。これは、時間的な言葉である。即ち、後に述べる如く、被造物なしには時間はないのであるが、時間の中に響く言は、被造物の運動を通して起こるのであり、被造物がそれ自身時間的でありながら、永遠なる神の意志に仕えて、神の言を伝えたのである。<sup>(32)</sup>これは、被造物を前提することなしには起こり得ず、従って、このように時間の中に響き、過ぎ去り行く言をもって、神が世界を造ったとは考えられない。時間もまた、被造物とともに、神によって造られたのである。<sup>(33)</sup>

10 創造に於て神が語った言は、従って、時間の中に消え去るようなものではなく、神と等しく永遠なる言、即ち御子キリストにほかならない。神が、「光あれ」等々と語った言は、前の場合と異って、綴りをもった時間的な言ではない。そこで、アウグスティヌスは、『創世記』冒頭の「はじめに」を、「根源に於て」、即ち「言に於て」或いは「キリストに於て」と解する。<sup>(34)</sup>これには、先にも述べた如く、『ヨハネ福音書』第1章1節以下の言が関連している。即ち、そこには、「はじめに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。すべてのものはこれによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。」<sup>(35)</sup>と記されている。この言は、神と等しく永遠なる言・キリストである。この言は、時間の中に響き、消え去ることなく、同時に、そして永遠に語られ、この言によって、神は世界を造ったのである。<sup>(36)</sup>それ故に、世界の創造に於ては、「はじめに」と語られているのである。時間の中に響いて消え去りゆく言は、形体的被造物の時間的運動を媒介とし、そのような言によって世界を造ったとしたら、世界の創造以前に既に何らかの形体的被造物が存在したことになり、これは、今までの所論から、受け入れられないことである。

11 この言はまた、神の知恵・永遠の理性ともいわれる。そして、この

理性に於ける認識が、被造物の存在の原因ともなる。即ち、神の認識は、存在するものを認識するのみではなく、実に、認識することによって存在せしめる働きでもある。従って、それはまた、意志的である。神が意志し認識するが故に、被造物は存在するのである。「存在しはじめたり、存在しなくなったりするすべてのものは、永遠の理性に於て、存在しはじめべきである、或いは存在しなくなるべきであると認識される時に、存在しはじめたり、存在しなくなったりするのであるが、そこに於ては、何もものも存在しはじめたり、存在しなくなったりすることはないのである。この理性は、汝の御言であり、我々に語り給えるが故に、はじめである<sup>(37)</sup>」。最後の句は後に論ずることとして、ここでは次の二つのことが語られている、と考えられる。第一は、永遠なる理性に於ける認識が被造物の存在の根拠であること、第二は、しかし、被造物そのものは存在しはじめたり、存在しなくなったりしても、この理性そのものの内に何かが存在しはじめたり、存在しなくなったりするのではない、ということである。何故神はこの世界を造ったかという創造の目的に関する問は、神がそれを欲したから、或いは、神の善性の充溢によるのである、として答えられた。神は全く自由なる意志によって創造の業をなしたのであり、そこには何ら自然必然性はない。神は全く完全であって、自分自身以外の如何なるものも必要としない。それ以上に神の意志の内奥に立ち入ることはできなかった。しかし、何れにせよ、神が世界を存在せしめようと意志したが故に、世界は存在するのである。従って、神の認識は、存在するものを、そのものとして認識するのではなく、むしろ、神が認識するが故に、存在するのである。しかも、神の認識は、人間の場合と異なり、あれこれの対象に固着したり、或いは、過去・未来に分向することなく、すべてのものを、同時に、即ち永遠に認識するのである<sup>(38)</sup>。『告白録』からは明らかでないが、『創世記逐語註解』などから、このことはまた、いわゆる種的理法 *ratio seminalis* とも関連している<sup>(39)</sup>、と考えられる。後述する如く、創造は時間に於て行われた

のではなく、従って、そこには何ら時間的順序といったものはない。神がはじめに天と地とを造ったという言によって、一切の被造物の創造が語られており、一々のものは列挙されずとも、既に、種としてそこに含まれており、神の認識によって、現実的存在となるのである。しかも、それは、神に於ては、何ら時間的継起を意味するものではないのである。人が生まれ、死ぬというようにして、世界には絶えず新しい生成消滅が行われているが、しかし、それによって、神の理性のうちに変化が起るわけではなく、神は、いわば永遠の今日<sup>(40)</sup>という次元で、過去・未来に分向することなく、すべてを同時に、永遠に認識するのである。創造は、このような神の認識・意志の働きにほかならず、それは全くの自由な働きであり、被造物の生成消滅に於て、永遠の理性に於て何かが存在しはじめたり、存在しなくなったりする、という対応関係を考えることはできないのである。

12 先程解釈を保留した句に戻ろう。これは、『ヨハネ福音書』第8章25節の「わたしはまた汝等に語るが故に、はじめ<sup>(41)</sup>である」というキリストの言に基づいている。『創世記』冒頭の「はじめに」in principioを、時間のはじめではなく、「言において」in Verbo ないし「キリストに於て」in Christo と解するアウグスティヌスは、『ヨハネ福音書』のロゴス・キリスト論と関連させることによって、創造の業を救済史的視点から眺めようとしている。「わたしはまた汝等に語るが故に、はじめである」という句を、アウグスティヌスは、『ヨハネ福音書講解』で、次のように解釈している。「もし、はじめが、父のもとにあるままに存在し、僕の形を取らず、人間として人間に語る事がなければ、如何にして彼を信じようか。弱い心は、<sup>(42)</sup>感覚的な声によらなければ、教知的な御言を聞くことができないから」。同様の消息は、『告白録』第11巻8章10節にも見られる。そこでは、受肉の秘義が、創造に関連して語られている。アウグスティヌスによれば、『ヨハネ福音書』がキリストをロゴスと呼んでいるのは、「はじめ」principium が、単に「はじめ」としてではなく、言い換えるならば、永遠なる

言が永遠なる言としてばかりではなく、感覚的な言として語る、ということである。それが、神が人となった、僕となった、という意味である。罪の故に弱くなった人間の心は、このような感覚的な言によってのみ、永遠なるロゴス、即ち自らの存在の根源へと立帰ることができるのである。<sup>(43)</sup>そのことが、いわば第二の創造として、神の創造の業に含まれて考えられている。『詩篇講解』では、人は、はじめに真理に等しく *veritati simills* 造られたが、罪を犯すことによって、無に等しい *vanitati similis* ものとなった<sup>(44)</sup>、と語っている。キリストによる救済とは、このような無に等しい人間が、キリストを「はじめ」と信ずることによって、再び真理に等しいものとして造られることにほかならない。

## VIII

13 『創世記』冒頭の「はじめ」*principium* を、永遠なる言と解し、この言によって、世界は無から造られた、とするアウグスティヌスの立場から明らかなように、彼は、創造が時間に於てなされたのではない、ということ<sup>(45)</sup>を強調する。時間もまた、世界と共に神によって造られたのである。彼は、恒常不変なる存在としての神と、存在のはじめをもつ<sup>(46)</sup>、即ち存在の根源を他に仰ぐ被造物との対応を否定する。神は時間を超越した永遠なる存在であり、被造物ははじめと終りをもつ時間的存在である。神は、恒常不変に存在する、即ち、存在しないものから存在するものへという存在のはじめをもたず、また、存在の根源を自らのうちに有している。そして、創造の目的因は、神の自由なる意志以外にない、とされたが、それも、あれを欲し、これを欲するという仕方<sup>(47)</sup>で時間的に変ることもなく、また、過去と未来とに分向することもない永遠なる意志である。神は、すべてのものを同時に認識し・意志する永遠なる存在であり、時間を全く超越している。創造は、そのような神の業としてなされたのであり、時間的な働きではない。世界は無から造られたが、これは全くの無であり、時間のないも

のである。アウグスティヌスによれば、時間は、何らかの変易性の存するところに生まれ、その意味では、世界が創造されてはじめて、時間というものもあり得るのである。<sup>(48)</sup>『創世記』には、「はじめに」と記されていて、明確な時間の表示がないのもそのためである。これには、次のような異論があったのである。神は創造以前には何をしていたか。もし神が、それまでになかった新しい意志を起したとすれば、神の意志は変化するものであり、従って永遠でなくなるのではないか。<sup>(49)</sup>これに対して、アウグスティヌスは先に述べた如く、創造は時間に於てなされたのではなく、創造以前には如何なる時間も存在しなかったのである。<sup>(50)</sup>即ち、時間のないところに、「そのとき」とか「以前」というようなことは、言われ得ないのである。時間もまた、神によって造られたのである。<sup>(51)</sup>

14 創造は、時間の或る一点に於て、神が新しい意志を起こし、世界を造ったという時間的な業ではない。神には、比喩的に言うならば、「永遠の今日」といわれる一日しかなく、すべてのものを同時に認識し意志するのであり、創造の業も、そのような神の永遠の働きなのである。創造の「はじめ」といわれるのは、従って、時間の或る一点というのではなく、神と等しく永遠なる言・独り子キリストを意味する。このロゴス・キリストに於て、神は世界を無から創造したのであり、このロゴスは、時間の中に響き消え去り行く言ではなく、同時にそして永遠に語られる言である。

15 アウグスティヌスによれば、時間は、運動の変化がなければ存在せず、そして、如何なる形体も存在しないところには、如何なる変化も存在しない。<sup>(52)</sup>従って、創造によって何らかの形体が存在するようになるまでは、時間というものはあり得ないのである。すべての形体的被造物は変易的であり、この被造物と共に時間は造られたのである。被造物のないところには時間は存在しない。<sup>(53)</sup>神は、あらゆる時間の創始者である。アウグスティヌスは、時間のない被造物として、観知的被造物（天）と、無形相の質料（地）とを挙げているが、<sup>(54)</sup>これらも、無時間であるとはいえ、決して永遠

なのではない。無時間と永遠とは異なるのである。

## IX

16 ここで、我々は、アウグスティヌスが『創世記』第1章1節を如何に解釈しているか、という問題に入ろう。「はじめに神は天と地とを造り給うた<sup>(55)</sup>」。「はじめに」は、既に述べられた如く、アウグスティヌスによって、「言に於て」ないし「キリストにおいて」と解された。残るところは、「天と地」の解釈である。彼は、『告白録』に於て、4通りの解釈を挙げているが、彼自身の解釈によれば、「天と地」は、被造的世界全体の総称であり、「天」は観知的被造物を、「地」はすべての形体的被造物が造られる無形相の第一質料を意味する。両者はともに時間のない被造物である。<sup>(57)</sup>

「汝が時間のないものとして造り給うた二つのものを見出すが、そのどちらも、汝と等しく永遠なのではない。一つは如何なる観照の中断も変易の間隙もなく、変易的でありながら、変易せず、汝の永遠性と不変性を享受するように形づくられたものであり、他の一つは、運動の形態にせよ、静止の形態にせよ、或る形態から他の形態へと変易しつつ、時間に制約されることのない無形相のものである<sup>(58)</sup>」。天は、被造物として変易性を有しながらも、絶えず存在の根源としての神のみを観照することによって、変易することなく、地は、如何なる形相ももたない無形相のものであるが故に、ともに、時間の制約を受けることがないのである。

17 天は、いわゆる穹蒼としての見える天に対しては、「天の天」caelum caeli と呼ばれる<sup>(59)</sup>。見える天は、地から造られ、地に含まれるからである。「天の天」はまた、「神の家」とも呼ばれ、神のみを観照し、常に現在する神に寄りすがり、未来と過去に分向することもなく、時間的な拡がりをもたない。しかし、これも、無から造られたものとして、変易性が内在し、決して神と等しく永遠なのではない。光に照らされることによって始めて光であるような照明された光であり、創造する知恵に対しては、

創造された知恵<sup>(61)</sup>であり、絶えず強大な愛をもって神を觀照し、神によって熱し輝かない限り、暗く冷くなる、即ち無へと向う存在なのである。

18 地は、無から造られたものとして、ほとんど無に等しいものであり、聖書は、それを、「地は見え<sup>(62)</sup>ず、形がなかった」と表現している。アウグスティヌスによれば、2節の「深淵」も「水」も、この「地」の異った表現に過ぎない<sup>(63)</sup>。すべての形体的被造物は、このほとんど無に等しい質料から造られたのであり、この無形相の質料は無から造られたのである。この質料は、全くの無形態であるが、形相づけられることのできるものであり、ギリシア語で「カオス」と呼ばれるものである<sup>(64)</sup>。「ところで、かの深淵全体は、未だ全く無形態であったから、ほとんど無であった。しかし、それは、既に形づけられることができるものであった。実際、主よ、汝は世界を無形相の質料から造り給い、そしてこの質料を無からほとんど無に等しいものに造り給うたが、そこから汝は人の子等が驚嘆する偉大なものを造り給うたのである。……そして、汝は、このような見えず形のない地から、無形態から、ほとんど無に等しいものから、これらすべてのものを造り給うたのである。この変易的な世界は、それらのものによって成り立っているが、恒常ではなく、世界には変易性が見られ、その変易性の内に時間は感じられ、測られるのである。時間は、前述の見えない地を質料とする諸形態が変化し変移するとき、諸物の変易によって生ずるのである<sup>(56)</sup>」。

19 無から、ほとんど無に等しい無形相の質料が造られ、この質料に形相が与えられて、すべてのものは形成された。しかし、このような質料が、形成された諸物に時間的に先立って実体的に存在したわけではない。質料も、それから形成されるすべてのものも、同時に造られたのである<sup>(66)</sup>。従って、そこには、何ら時間的順序といったものは存在しないのである。諸々の被造物の創造は、3節以下に、第2日の業、第3日の業等々として、あたかも時間的順序に従ったかの如く記されているが、それは、単なる表現上の問題にすぎない。最初に世界創造の全体について語り、次に個々のも

の<sup>(67)</sup>について語っているのである。創造は、神の永遠なる働きであり、従って、六日間にわたる創造の業はすべて同時に、「永遠の今日」に於て行われたのである。無形相の質料と他の諸物との関係は、従って、時間的秩序を意味するものではなく、原因的秩序 *ordo causalis* を意味するものである。<sup>(68)</sup>それは、ちょうど、音声と歌の関係に似ている。<sup>(69)</sup>歌の音声は歌の質料である。しかし、歌の形式に形成されていない音声<sup>(69)</sup>を時間上先に発し、その後その音声<sup>(68)</sup>を歌の形式に整えて歌に作り上げるわけではない。音声は歌われてはじめて聞こえるのであり、あらかじめ形式なしに響いて、それから歌に形成されるのではない。音声は、歌となるように形成され、その意味で、音声の質料は、歌の形式に先立つのである。質料としての地が造られ、そこからすべてのものが形づくられるという区別が一応考えられるが、むしろ、その両者 (*creare* と *formare*) が同一のものとして、創造は捉えられる。アウグスティヌスは、ここでもまた、罪からの救済と、無からの創造とを対応させて考えている。即ち、「形づくる」とは、「神へ向う」ことを意味し、それによって、分散した混乱から統一へと、新しい人間に<sup>(70)</sup>造られるのである。

## X

20 以上、アウグスティヌスの「無からの創造」の思想について、大まかな概観を試みた。彼の立場を、救済史的視点からの創造理解と言ったが、変易し変化する世界と時間の流れの中で、創造という神の永遠なる働きを捉えることは、彼に於ては、キリストによってはじめて可能とされるものであった。永遠と時間の交差する唯一の場としてのキリストに於て開かれる世界と歴史の展望、それがアウグスティヌスの語るところのものであろう。

## 註

- (1) 本稿では、アラグスティヌスのテキストはすべて Desclée 版 *Oeuvres de Saint Augustin* を用いたが、未刊行の上記聖書註解書については Migne 全集を用いた。
- (2) 一般に *creatio ex nihilo* といわれるが、アウグスティヌスが特に *creatio de nihilo* という語を用いたについては、本稿IV 6.参照。
- (3) *Soliloquia I*, 7
- (4) 本稿 VII 12.参照。
- (5) *Confess. XII*, 7, 7. *Tu eras et aliud nihil, unde fecisti caelum et terram.*
- (6) *ibid. Itaque tu, domine, qui non es alias aliud et alias aliter, sed in ipsum et id ipsum.*
- (7) *ibid. VII*, 15, 21; *XII*, 7, 7; *De libero arbitrio II*, 20, 54.
- (8) *Confess. VII*, 12, 18. *ergo quamdiu sunt, bona sunt.*
- (9) *De Gen. contr. Manich. I*, 2, 4. *sicut omnia quae fecit Deus bona sunt valde, sed non sic bona sunt, quomodo bonus est Deus, quia ille fecit, haec autem facta sunt. --Confess. XI*, 4, 6.
- (10) *Confess. XII*, 11, 11. *Item dixisti mihi, domine, voce forti in aurem interiorem, quod omnes naturas atque substantias, quae non sunt quod tu es et tamen sunt, tu fecisti:et hoc solum a te non est, quod non est; motusque voluntatis a te, qui es, ad id quod minus est, quia talis motus delictum atque peccatum est.....*
- (11) *ibid. XI*, 4, 6. *Ecce sunt caelum et terra, clamant, quod facta sint; mutantur enim atque variantur.*
- (12) *ibid. 7*, 9.
- (13) *ibid. 4*, 6. *Tu ergo, domine, fecisti ea, qui pulcher es: pulcher sunt enim; qui bonus es: bona sunt enim; qui es: sunt enim. Nec ita pulchra sunt nec ita bona sunt nec ita sunt, sicut tu conditor eorum, quo comparato nec pulchra sunt nec bona sunt nec sunt.*
- (14) *De Gen. contr. Manich. II*, 29, 43. *Postremo quoniam cum Manichaeis*

nobis de religione quaestio est, quaestio autem religionis est, quid de Deo pie sentiatur, quoniam negare non possunt in miseria peccatorum esse genus humanum; illi dicunt naturam Dei esse in miseria: nos negamus, sed dicimus eam naturam esse in miseria, quam de nihilo fecit Deus, et ad hoc venisse non coactam, sed voluntate peccandi.

(15) →(10)

(16) Confess. VII, 16, 22.

(17) ibid. 3, 4.

(18) De Gen. contr. Manich. I, 2, 4. nec ea genuit de seipso, ut hoc essent quod ipse est; sed ea fecit de nihilo, ut non aequalia, nec ei a quo facta sunt; nec Filio eius per quem facta sunt; iustum est enim. --- De Gen. ad litt. imperf. 1, 2. non de Dei natura, sed a Deo sit facta de nihilo: nihilque in ea esse quod ad Trinitatem pertineat, nisi quod Trinitas condidit, ista condita est. Quapropter creaturam universam neque consubstantiam Deo, neque coaeternam fas est dicere aut credere.

(19) Confess. XII, 7, 7. in principio, quod est de te, in sapientia tua, quae nata est de substantia tua, fecisti aliquid et de nihilo. Fecisti enim caelum et terram, non de te nam esset aequale Unigenito tuo ac per hoc et tibi et nullo modo iustum esset, ut aequale tibi esset, quod de te non esset.

(20) De natura boni XXVII, 27. "Ex ipso" autem non hoc significat quod "de ipso". Quod enim de ipso est, potest dici ex ipso. Non autem omne quod ex ipso est recte dicitur de ipso. Ex ipso enim caelum et terra quia ipse fecit ea, non autem de ipso quia non de substantia sua. Sicut aliquis homo si signat filium et faciat domum, ex ipso filius, ex ipso domus; sed filius de ipso, domus de terra et ligno. Sed hoc quia homo est, qui non potest aliquid etiam de nihilo facere. Deus autem ex quo omnia, per quem omnia, in quo omnia, non opus habebat aliqua materia quam ipse non fecerat adiuvari omnipotentiam suam.

(21) De Gen. contr. Manich. I, 6, 10. Et ideo Deus rectissime creditur omnia

de nihilo fecisse, quia etiamsi omnia formata de ista materia facta sunt, haec ipsa materia tamen de omnino nihilo facta est.

22) Confess. XI, 5, 7; De Gen. contr. Manich. I, 8, 13.

23) De Gen. contr. Manich. I, 6, 10. Omnipotens autem Deus nulla re adiuvandus erat, quam ipse non fecerat, ut quod volebat efficeret. Si enim ad eas res quas facere volebat, adiuwabat eum aliqua res quam ipse non fecerat, non erat omnipotens: quod sacrilegum est credere.

24) De civitate Dei XII, 26.

25) De vera religione 13, 26.

26) De Gen. contr. Manich. I, 2, 4. Causas enim voluntatis Dei scire quaerunt, cum voluntas Dei omnium quae sunt, ipsa sit causa. Si enim habet causam voluntas Dei, est aliquid quod antecedit voluntatem Dei, quod nefas est credere. Qui ergo dicit, Quare fecit Deus caelum et terram? respondendum est ei, Quia voluit. Voluntas enim Dei causa est caeli et terrae, et ideo maior est voluntas Dei quam caelum et terra.

27) Confess. XIII, 2, 2. Ex plenitudine quippe bonitatis tuae creatura tua subsistit, ut bonum quod tibi nihil prodesset nec de te aequale tibi esset, tamen quia ex te fieri potuit, non deesset. --- De civitate Dei XI, 24.

28) ibid. 3, 4.

29) ibid. 4, 5. Quid ergo tibi deesset ad bonum, quod tu tibi es, etiamsi ista vel omnino nulla essent vel informia remanerent, quae non ex indigentia fecisti, sed ex plenitudine bonitatis tuae cohibens atque convertens ad formam, non ut tamquam tuum gaudium compleatur ex eis? perfecto enim tibi displicet eorum imperfectio, ut ex te perficiantur et tibi placeant, non autem imperfecto, tamquam et tu eorum perfectione perficiendus sis.

30) ibid. VII, 12, 18.

31) ibid. XI, 5, 7.

32) ibid. 6, 8.

33) ibid. 13, 15.

- 34 De Gen. contr. Manich. I, 2, 3. His respondemus, Deum in principio fecisse caelum et terram, non in principio temporis, sed in Christo, cum Verbum esset apud Patrem, per quod facta et in quo facta sunt omnia.
- 35 In principio erat Verbum, et Verbum erat apud Deum, et Deus erat Verbum. Hoc erat in principio apud Deum. Omnia per ipsum facta sunt, et sine ipso factum est nihil quod factum est. (Vulg.)
- 36 Confess. XI, 7, 9.
- 37 ibid. 8, 10. omne quod esse incipit et esse desinit, tunc esse incipit et tunc desinit, quando debuisse incipere vel desinere in aeterna ratione cognoscitur, ubi nec incipit aliquid nec desinit. Ipsum est Verbum tuum, quod et principium est, quia et loquitur nobis.
- 38 ibid. 31, 41.
- 39 ここでは論ずることができないが、例えば、De Gen. ad litt. VI, 6, 10 ; IX, 17, 32等参照。
- 40 Confess. XI, 13, 16.
- 41 Principium, quia et loquor vobis. Vulgata 訳は principium, qui et loquor vobis. となっている。ギリシア語原文は *τὴν ἀρχὴν ὅτι καὶ λαλῶ ὑμῖν* で、例えば、Even what I have told you from the beginning. (RSV) と解する訳がある。
- 42 Tract. in Ioann. XXXVIII, 11. Nam si principium sicut est, ista maneret apud Patrem, ut non acciperet formam servi et homo loqueretur hominibus, quomodo ei crederent, cum infirma corda intellegibile Verbum sine voce sensibili audire non possent? Ergo, inquit, credite me esse principium; quia, ut credatis, non solum sum, sed et loquor vobis.
- 43 Confess. XI, 8, 10.
- 44 Enarr. in Ps. 143, 11. Ergo homo vanitati similis factus est. Peccando vanitati similis factus est. Nam quando est primum conditus veritati similis factus est.
- 45 Confess. XI, 13, 15.

- (46) De Gen. ad litt. imperf. 3, 8.
- (47) Confess. XII, 15, 18.
- (48) ibid. XII, 8, 8.
- (49) ibid. XI, 10, 12.
- (50) ibid. 13, 15.
- (51) De Gen. contr. Manich. I, 2, 3.
- (52) Confess. XII, 11, 14 : De Gen. ad litt. imperf. 3, 8.
- (53) De civitate Dei XI, 6.
- (54) Confess. XII, 12, 15.
- (55) In principio fecit Deus caelum et terram. Vulg. 訳では, In principio creavit Deus caelum et terram.
- (56) Confess. XII, 17, 24-26.
- (57) ibid. 9, 9.
- (58) ibid, 12, 15.…… duo reperio, quae fecisti carentia temporibus, cum tibi neutrum coaeternum sit : unum, quod ita formatum est, ut sine ullo defectu contemplationis, sine ullo intervallo mutationis, quamvis mutabile, tamen non mutatum tua aeternitate atque inconmutabilitate perfruatur; alterum, quod ita informe erat, ut ex qua forma in quam formam vel motionis vel stationis mutaretur, quo tempori subderetur, non haberet.
- (59) ibid. 2, 2.
- (60) ibid. 11, 12.
- (61) ibid. 15, 20.
- (62) Terra erat invisibilis et incomposita. Vulg. 訳では, Terra autem erat inanis et vacua. となっている。前者は恐らく, ἡ δὲ γῆ ἦν ἀόρατος καὶ ἀκατασκεύαστος (LXX) からの訳と思われるが, 後者の方がヘブル語本文の訳としては近い。
- (63) De Gen. contr. Manich. I, 7, 12. Haec ergo nomina omnia, sive caelum et terra, terra invisibilis et incomposita et abyssus cum tenebris, sive aqua super quam Spiritus ferebatur, nomina sunt informis materiae……

64) *ibid.* 5, 9.

65) *Confess.* XII, 8, 8. *illud autem totum prope nihil erat, quoniam adhuc omnino informe erat; iam tamen erat, quod formari poterat. Tu enim, domine, fecisti mundum de materia informi, quam fecisti de nulla re paene nullam rem, unde faceres magna, quae miramur filii hominum…… de qua terra invisibili et incomposita, de qua informitate, de quo paene nihilo faceres haec omnia, quibus iste mutabilis mundus constat et non constat, in quo ipsa mutabilitas apparet, in qua sentiri et dinumerari possunt tempora, quia rerum mutationibus fiunt tempora, dum variantur et vertuntur species, quarum materies praedicta est terra invisibilis.*

66) *De Gen. ad litt.* I, 15, 29. *Non quia informis materia formatis rebus tempore prior est, cum sit utrumque simul concreatum, et unde factum est, et quod factum est.*

67) *ibid.* 3, 8.

68) *ibid.* V, 5, 13. *Non itaque temporali, sed causali ordine prius facta est informis formabilisque materies.*

69) *Confess.* XII, 29, 40.

70) *De Gen. ad litt.* I, 4, 9.